

## II. 遺 跡

### 1. 遺跡の概観

平城宮の背後に広がる奈良山丘陵一帯は佐紀盾列古墳群<sup>さききたなみ</sup>と称される古墳の分布地帯である。西から神功皇后陵、成務天皇陵、日葉酢媛命陵、塩塚、猫塚、瓢箪山、市庭、磐之媛陵、コナベ、ウワナベといった雄大な前方後円墳がならび、それらの間を埋めるようにやや規模の小さい前方後円墳や、その陪冢、その他円墳、方墳等が分布している。平城宮の造営に伴って、こうした古墳のいくつかは破壊され、地上に姿を留めない。これまで明らかになったものに、市庭古墳と第2次内裏地区の神明野古墳があり、その他にも地形や遺物の出土状況から2・3の存在が推定できる。市庭古墳は、1962、3年の発掘によって初めて前方後円墳であることを確認し、付近の字名をもとに命名したもので、現状は後円部の一部が円墳状を呈し、近世に平城天皇陵に治定された。前方部の調査に引き続き、後円部側でも住宅建設に伴う小規模な調査を実施し、これらの資料と水田の畦畔、字切図をもとに旧状の復原を試みた。<sup>註1</sup>今調査区は後円部の一部と濠・外堤にかかり、市庭古墳の復原にとって重要な知見をもたらすことが期待された。

平城宮造営によって市庭古墳周辺の景観は一変した。古墳自体もくびれ部付近に宮の北辺大垣が築かれ、後円部の一部を残して以南は削平された。では宮の北側にどんな施設があったか。文献の記録と平安京宮城図、現地形との対比から、宮の北側には大蔵省の倉庫群や園池があったと推定されていたが、その位置は明確ではなかった。宮北方の林間中には従来古墳の外堤あるいは超昇寺の痕跡と考えられた土塁状の高まりが点在する。1979年に至り、橿原考古学研究所はこうした土塁が一連の築地痕跡であり、この築地による区画が『続日本紀』にみえる「松林苑・松林宮」に該当し、その規模を現存の築地痕跡と地割から東西約0.5km、南北1km以上と推定した。その後、同研究所は西辺と南辺築地の一部を発掘し、この築地が平城宮の大垣と同規模であること、出土瓦には藤原宮からの転用瓦や平城宮軒瓦編年の第I期の軒瓦が含まれること、以上から築成時期は平城宮の造営当初に遡る可能性を明らかにした。<sup>註2</sup>当調査部も南辺築地が二重になる部分で調査を実施(123-12次)、推定南辺築地と北側に巾5.3m、深さ2.8mの空濠を検出した。宮の北に広大な「松林苑」の存在が明らかになった結果、宮との中間地帯が問題となってきた。殊に「松林苑」南辺築地の東西コーナーの推定地が各々宮北辺の西門と東門の推定位置にほぼ一致すること、南辺築地と宮北大垣との心々距離が240.12m(約800尺)であることは「松林苑」の配置が厳密な計画のもとに行われたことを物語る。岸俊男氏は、以上の知見と平安宮の例をもとに、この中間地帯に大蔵省の倉庫群が設けられた可能性を考えている。<sup>註3</sup>今調査区はこの大蔵省推定地に含まれ、関連遺構が期待できよう。なお、宮北大垣から北170m、称徳天皇・日葉酢媛命陵の両古墳の南に南北巾15m、東西長350mに及ぶ地割がある。<sup>註4</sup>これが秋篠川に通じる運河とそれに連なる道路遺構とすれば、大蔵省への物資運搬という観点から重要である。平安遷都後この地に創建をみたのが超昇寺である。平城上皇は弘仁年間に平城遷都を企てて挫折、第三皇子の高岳親王は仏門に帰依、のち超昇寺を創建と伝える。超昇寺には、本堂、法華三昧堂(『諸寺縁起集』)阿彌陀堂(『七大寺巡礼記』)があった。寺地は御前池の北とされるが明らかではない。この後、寺に関係した一族がこの池の西岸に超昇寺城を築いた。大和の戦国時代の幕開きであった。

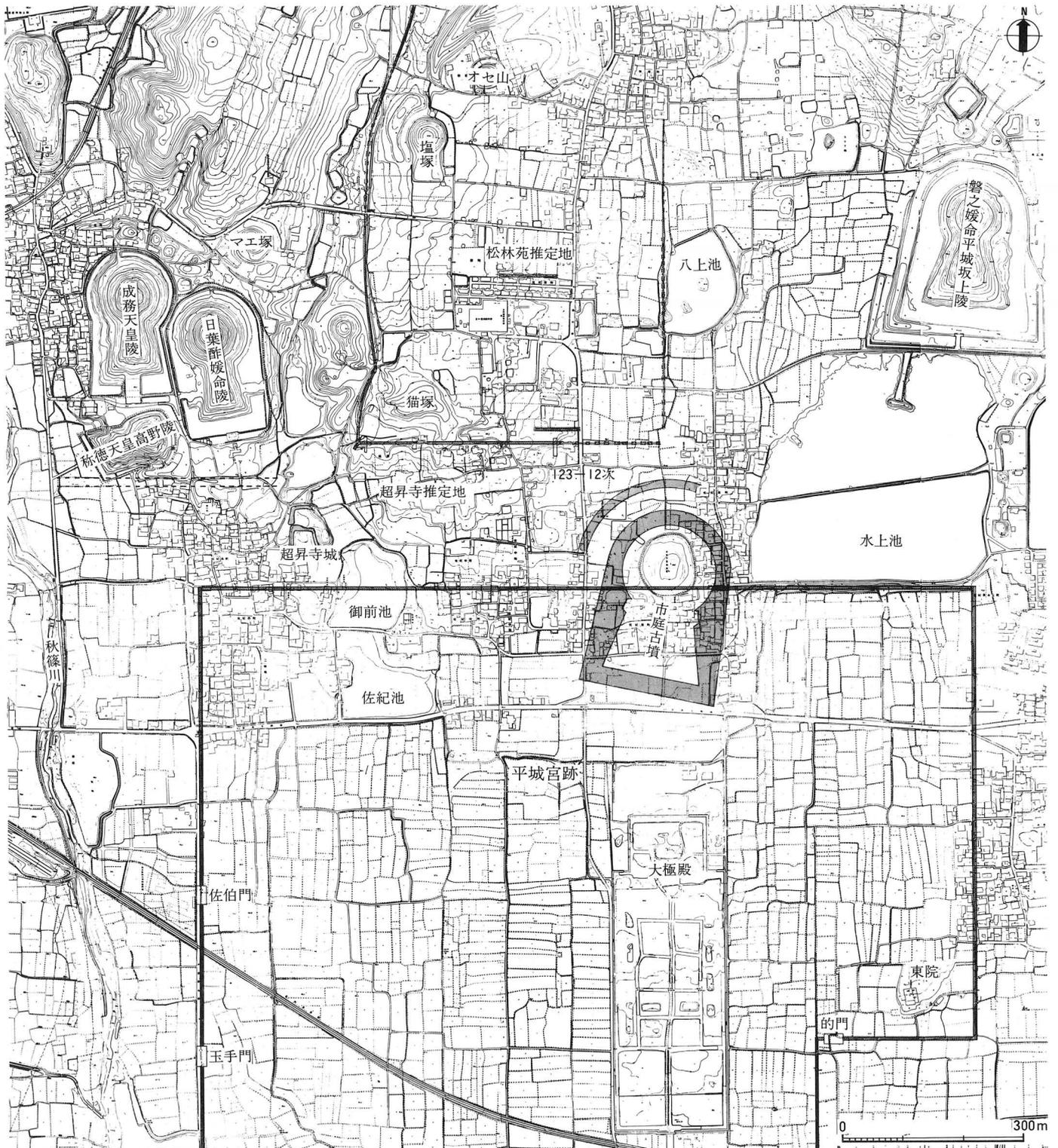


fig. 7 遺跡周辺の歴史的環境

註1 『平城宮跡発掘調査報告 VII』(奈良国立文化財研究所学報 26) 1978

註2 河上邦彦「松林苑の確認と調査」奈良県観光 277号 1979

奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館速報展示解説 17号 1980

註3 岸俊男「松林苑と年中行事」奈良県観光 277号 1979 のち『遺跡・遺物と古代史学』1980に収録

註4 村田修三「超昇寺城」『日本城郭大系 10巻』1980

## 2. 市庭古墳の遺構

市庭古墳 S X 500は奈良時代に破壊し、濠を埋立てている。この整地土の下から墳丘の一部、内濠 S G 2150を検出し、また外堤 S X 2170、外濠 S G 2160、埴輪列 S X 2153等を確認した。

**S X 500** 墳丘は本来3段築成と推定されているが、最下段の基底部のみを検出。この基底部は地山の茶褐色礫土、茶褐色砂質土、灰色砂層を削り出して形成している。第1段のテラスを確認するために基底部斜面の東側に発掘区を拡張したが、地土を掘りこんだ奈良時代の土壇 S K 2158を検出したのみで、墳丘盛土や埴輪据えつけ痕跡などは確認できなかった。S K 2158が示すように、この部分の墳丘は奈良時代に地山面まで削平していたようである。

**S X 2151(PL. 5)** 墳丘西斜面の葺石は、南北約4.5m、東西約5.3m、高さ3m分を検出。古墳の破壊作業による夥しい転石が表面を覆っていた。葺石の据には大形(25~40cm)の河原石を1列、1部は2列に並べて据石としている。裾石のならびから復原した円弧は、直径150mである。葺石の設置は、地山を切り土した法面に灰褐色砂土や暗灰色砂土をこめながらバラスを詰め、その上に直径15~25cmの石を小口積みとする(fig. 9)。しかし崩れたり、大きくはらんだところがあり、そこでは裏ごめのバラスが露出している。傾斜角度は約28°である。以前調査した前方部の葺石は、斜面に人頭大の石を下から上へ1列に並べて区画線としている(PL. 6)が、6AFV区では検出できなかった。

**S G 2150(PL. 4)** 内濠は6AFV区と6AAN区で発掘した。6AFV区では墳丘から外堤まで41m、巾9m(一部は6m)のトレンチを設けて発掘し、葺石 S X 2151、2152と濠の底を確認した。S X 2151と2152の裾石の間隔は29.5m。濠の底は中央部分に向って緩やかに傾斜する。この底に厚さ0.4mの有機物を含んだ暗灰色粘土、灰色粘土層があり、この層以上奈良時代の遺構面までの2.6mは全て黄褐色系粘質土の整地層で、大部分が墳丘側から埋立てられている(fig. 10)。遺物は埴輪片の他にはなかった。この状況は6AAN区でも共通し、前方部側の調査所見とも一致するものである。従って後円部側の内濠も平城宮造営に伴って、墳丘を切り崩した土で埋め立てられたものと考えられる。濠底の海拔高は6AFV区が74.0m、6AAN区が74.5mを測る。後者が前者より0.5m高いのは発掘区的位置が墳丘裾に近いためであろう。前方部側の調査では東南隅と西南隅付近で濠の底を確認しており、その標高は71.7mである。これは6AAN区とは2.8m、6AFV区とは2.3mの差がある。西南隅付近と6AFV区との距離は約250mであるから、濠の底の傾斜は約31'である。

**S X 2170(PL. 4)** 外堤は褐色粘質土や地山の茶褐色礫層を削り出して形成する。南北約40m分を検出した。埴輪列 S X 2153の周辺を除き、表面の大半は開田工事によって削られ、地山が直接露呈している。東西両斜面の葺石 S X 2152と S X 2161の裾石間の距離は32.5m。発掘区外堤表面の旧傾斜は、埴輪列 S X 2153の埴輪の底面の傾斜と葺石 S X 2161の傾斜をもとに、北から南に約50'と推定する。S X 2153の北端埴輪周辺の海拔高を基準とすると、東斜面葺石 S X 21

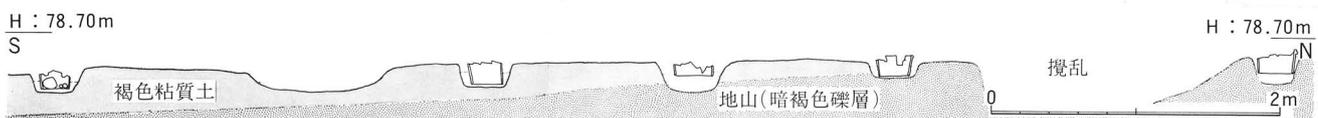


fig. 8 SX2153据えつけ状況

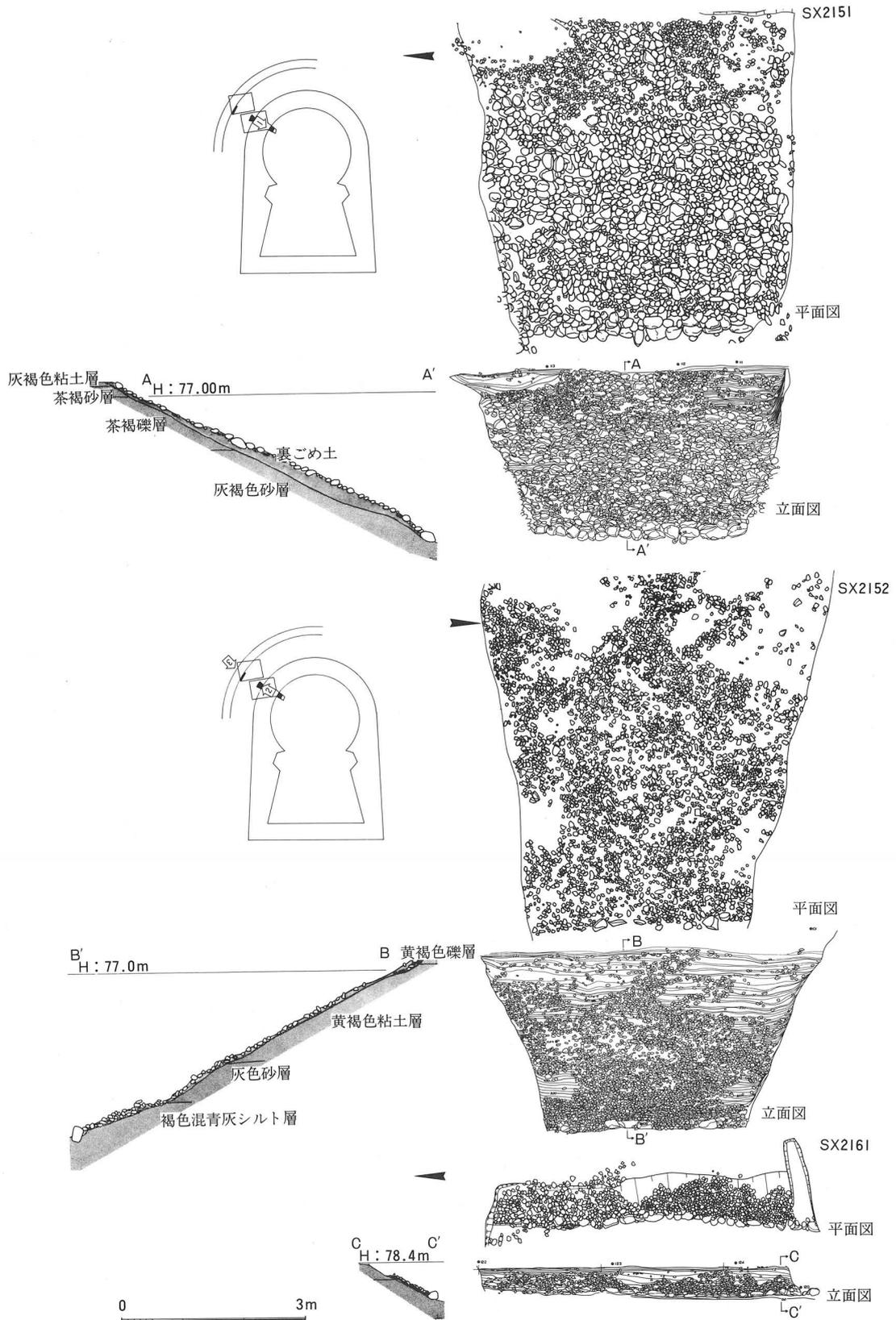


fig. 9 葺石実測図

52裾石上面との比高差は4.07m、西斜面葺石 S X 2161裾石上面との比高差は0.67m。

**S X 2153**(PL. 7) 外堤上に据えられた埴輪列は、保存状態が悪く、後世畑地として利用された部分に5本分の基底部が残存したが、水田として利用された部分では全て削平され、据えつけ痕跡も留めない。埴輪は約1.4mの間隔に壺掘りして据えつけている。最北端の1点のみ、地山の暗褐礫層を掘りこみ、以南の4点は褐色粘質土を掘りこむ(fig. 8)。埴輪周辺の海拔高は最北端の場合が78.6m、最南端の場合が78.55mである。

**S X 2152**(PL. 5) 外堤東斜面の葺石は東西5m、南北3~3.5m、高さ3m分を検出。人頭大の河原石を並べて裾石としているが、この一部と葺石の大半は失われ、裏ごめのバラスのみが残っていた。傾斜角度は約28°である。葺石の裾えつけは S X 2151同様、地山を切り土した上に若干の土をおきながらバラスを詰めている。裾石の上面の海拔高は74.53mで、S X 2151の裾石より20cm低い。また裾石のならばから復原した円弧の直径は約209mである。

**S X 2161**(PL. 5) 外堤西斜面の葺石は、奈良時代の園池 S G 2162の洲浜下層に、南北5.2m、東西0.8m分を検出した。地山の黄褐色礫土上に暗茶褐粘質土をおき、裾石を設置する。裾石は横長の石(20~30cm)をならべ、それ以上はバラスを葺く。葺石の傾斜角度は約30°。最南端の裾石の上面は、海拔77.93mで、S X 2152のそれとの比高差は3.4mである。

**S G 2160**(PL. 4) 地山の茶褐色礫層を掘りこんだ浅い外濠で、巾は西側のたち上りと外堤西斜面の傾斜変換点との間で、約18mを測る。西斜面は素掘りで、葺石はみられない。底は凹凸があるが、地形にそって北から南に緩やかに傾斜し、最も低いK区南端の海拔高は77.80mである。但し、外濠は奈良時代に手を加えて園池としており、当初の姿を復原するには検討が必要である。外濠については後円部の真北には存在したようで、6AFJ区の北東延長線上には弧状の畦畔がある。他方、西側の延長線上にあたる県道上では、1980年10月の道路の掘削工事に際して地山の下がりや灰色粘土を確認しているから、後円部の周辺には存在したのであろう。

市庭古墳の復原は、以前当研究所が試みたが、<sup>註</sup> 当時は後円部復原に関する確実な資料が少なかった。その後、墳丘の西と北に小規模調査(95-11次、103-2次)を実施し、これに今回の知見を加えることで先の復原案は一部修正が可能となった。すなわち、後円部基底部の裾石を基準とした基底線の直径は約150m、前方部を含めた墳丘全長は約250m、前方部幅約160mである。周囲にめぐると内濠は狭いところで29.5m、深さ4.5m程と考える。以前の復原と異なる点は、後円部直径が大きくなったこと、濠が深くなったこと、一部に外濠がめぐることである。

註 『平城宮発掘調査報告 VII』(奈良国立文化財研究所学報26) 1978

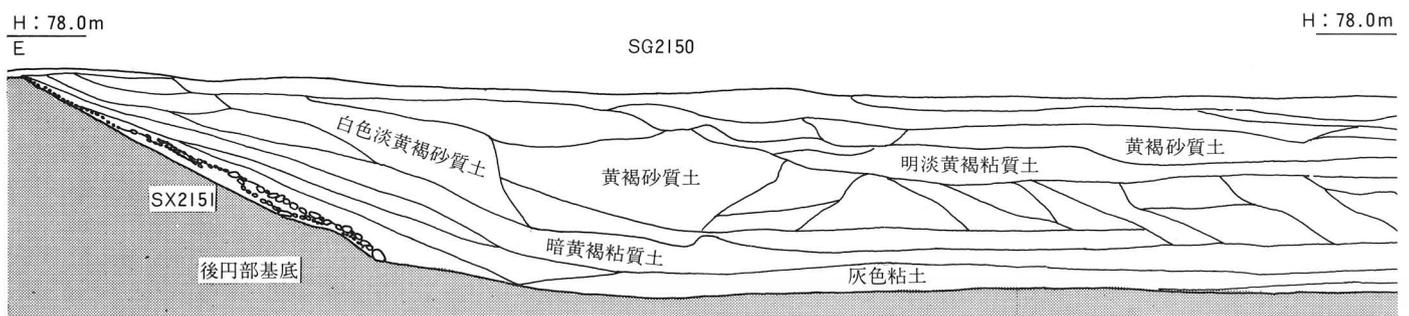
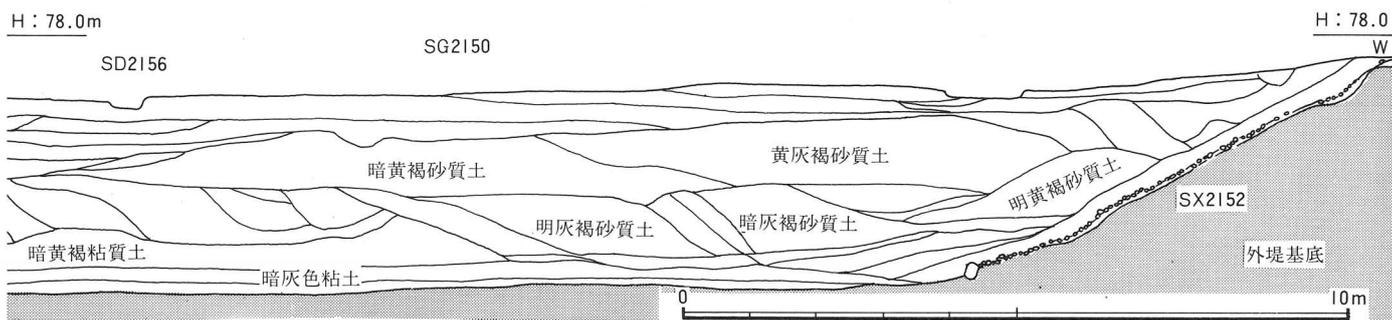


fig. 10 SG2150埋土土層図



fig. 11 市庭古墳復原図



74.7

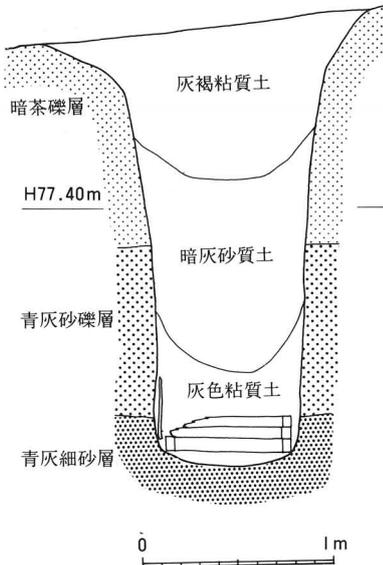
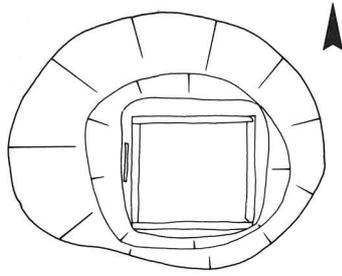


fig.12 SE2163

### 3. 奈良時代の遺構

検出した主要遺構は、園池・井戸1基、建物1棟、暗渠1条、溝2条、土壇などである。

**SG2162** 市庭古墳の外濠SG2160は奈良時代に入ると園池として利用している。外堤の葺石SX2161を茶褐色粘質土で覆い、その上に小礫を敷き洲浜とする。洲浜は蛇行し、一部に出島の痕跡をとどめる。池底は茶褐色礫層や灰褐色砂層、褐色粘土が部分的に交替し、またところどころに凹凸があり、中島の名残りの高まりもある。池の深さは外堤部表面が後世の削平を受けていて明らかではないが、80cm程であろう。池の堆積土中には明確に腐蝕土といえるものではなく、常時水を湛える状態ではなかったのであろう。なお池底に密着するかたちで、藤原宮式や平城宮式の軒瓦が出土したが、埴輪片は少なく、園池を営む際、古墳の濠底を浚えているのであろう。

**SE2163** SG2162の汀線に接して掘られた井戸。検出面から底まで深さ約2.5mを測る。掘形は上面では径約1.6mの円形を呈すが、底は一辺0.8mの方形となる。底には板を井籠に組んだ井戸枠が3段分残っていた。枠板は長さ65cm、幅5～8cm、厚さ5cm、井戸枠の内法一辺長は56cmである。組手仕口は三枚組継ぎとし、東西面の枠木に出枘を、南北面の枠木に入枘を設ける。掘形と西面枠木の間には井戸枠据えつけ時の添え木である縦板が1枚残っていた。井戸枠は1段の成が低く、当初は40段程度あったのであろう。井戸の埋め土からは廃絶時に投棄した軒瓦6663型式や、奈良時代後半の須恵器、土師器が出土した。SE2163は位置からみて園池への給水用施設であろう。ただし、この井戸によってどの程度水を補い得たか疑問がある。丘陵上の井戸であるため湧水に乏しいと考えるのである。事実、調査中も不断は湧水はみられず、多量の降雨後にそれがみられた。従って、SG2162の水源を井戸に頼ったとすれば、こうした井戸が他にもあったと推測できよう。

**SD2164** SE2163の西南に接する斜行溝。玉石を横にならべて側石とし、内法幅約25cmを測る浅い溝。長さ約2m分を検出。おそらく園池に井戸の水を注ぐ施設であろう。

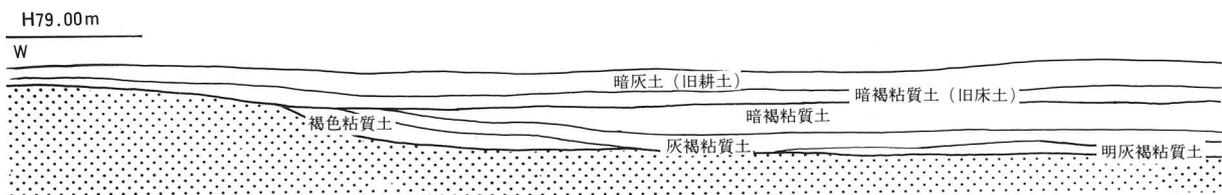


fig.13 SG2162土層図

